哲學研究　第四百號　第三十五卷第二冊

論理性

山内得立

一

論理といふものが人間の思想の歴史に於て現はれ初めたのは何時頃であつただらう、――それを問ふことは人間が言葉を語り、語によつて思想を云ひ表したことが何時頃であつただらうかを問ふことと同じやうに愚しいことであるともいへるのであるが、文法があつて言葉があるのではなく、言葉が話されたのちに文法が成立するのであるやうに、思惟の方法としての論理も比較的高度に發達した人間の思想生活に於て初めて現はれ得べきものであることは明かであるであらう。ギリシアに於ては論理の萠芽といはるべきものの見出されるのは、エレアのパルメニデスに於てであることは通說となつてゐる。* 勿論彼に於てもそれは一つの學問的方法としてあからさまに定說せられたわけではなく、彼はただ學問の研究が如何に始めらるべきであり、如何なる仕方によつてそれが最も確實にして誤られざる正しさに於てあるかを誠實に探し求めようとした。彼はこのために人々の最も好む具象性をも犧牲にした。彼に先だつ、又は彼と同時代の人々が或は水を、火を、空氣を求めたに反して、存在を存在として、存在そのものを求めたと

ころに彼の獨自なる徹底した立場があつたのである。事物とは何であるか、それは最も一般的には存在である。存在とは何であるか、存在とは存在である。存在で限定するに何らか特殊なる事物を以てせずして、專ら存在を存在自らによつて規定せんとしたところに彼の特異なる立場があつた。存在をその意味に於て規定せんとする西洋の傳統的なる形而上學は實に彼に於て端を發したと見ることもできる。併し論理の上に於て注意せらるべきは、存在の概念であるよりもむしろ存在を規定せんとするまさにその仕方にあつたのである。存在が存在であることは存在が非存在でないことを意味するところからして、それは一方に存在の同一性を言表すとともに存在が非存在と兩立しないことを、もしそれが同時に成立すれば矛盾に陷ることを言表してゐなければならない。論理の根本原則といはるる同一律と矛盾律とはかくして彼の「存在は存在である」といふ根本命題から出發するのである。同一律は同語反覆ではない、極端にいへば凡ゆる判斷はこの同一律を基礎とし、凡ゆる論理はこの原則から出發するものとさへ言ひ得るのである。それを人間の明かなる意識にもたらした人はパルメニデスであつた。ギリシアの數多くの自然哲學者の間にあつて彼が我々にとつて特に有する意義の重要さもここにあると見ることができるのである。

※　論理學の歷史をかいたプラントルもエレア學派を以てその敍述を初めてゐる。

アリストテレスは多くの意味に於てパルメニデスにつらなつてゐる。形而上學を「存在が存在である限りに於て存在を探求する學問」として定義したことも、そして文字通りに形而上學が彼の名に於て確立せられたことも周知の事がらであるが、就中彼の力によつて大成された論理學がエレアの思想方法によつて發展せしめられたことは重要である。思想の三法則といはれる同一律と矛盾律と排中律とは形式論理學の基礎をなしてゐる。眞理とはその中に矛盾を含まざることによつて成立するものであることは論理の第一歩に屬することであつた。勿論アリストテレスの論理はこの上に更に多くのものを加へてゐる、論證法とか推論式とかが彼の論理の中軸をなすことは明かであるが、これらの出發點は依然として同一律等に横たへられてゐることは何人も爭ひ得ぬところであるであらう。

同一律がパルメニデスによつて發見せられたものとすれば、矛盾律を唯一の武器として論難した人は彼の弟子ゾエノンであつた。ゾエノンが運動を否定して一種の詭辯を弄したのは運動の概念の中にふくまるる矛盾――卽ちそれが存在と同時に非存在をふくむことによつて成立つ概念であることに基く。運動とはかくの如き矛盾をふくむが故に、そして矛盾をふくむものは成立しない筈であるが故に、運動はあり得ないと說くのである。しかしそれにも拘らず運動は存在する。ゾエノンの詭辯は運動の概念からして運動の事實を論定せんとするものであつた、運動の概念は矛盾律によつて規定せられるとしても、その事實はそれによつて決定せられることはできない、それを敢へてせんとするところに詭辯に陷らざるを得なかつた理由があるのである。

矛盾の原理は同一律と同じものであり、ただそれを裏がへして立言したものにすぎない、「存在は存在である」といふことは、「存在は非存在ではない」といふことと同じ原理でしかないであらう。前者を基本としたのがパルメニデスであるとすれば、後の原理に立つて論じた人がゾエノンであり、これらの人々は共にエレア學派に屬してゐる。そしてこれらの人々が人間の思想の歷史に於て、論理的なるものの意識に達した最初の人々であるとするならば、論理といふものが何を出發とし、何をその始原としてゐるかは自ら明かであらう。

アリストテレスの論理は勿論エレア派のそれに比して格段の進步をなしてゐる。彼の分析論、前後の二書に展開せられた精密なる論理は今日と雖も驚嘆に價するものであり彼の論理の體系はかつてカントの云つた如く、ヨーロッパの論理學はアリストテレス以來一步も進步しもしなければ退步しもしなかつたと思はれるほど長い期間に亘つて支配的であつたが、その根本原理とするところはやはり思惟の三大法則を出でなかつたと見らるべきであるであらう。アリストテレスの論理が所謂形式論理ではなく、單なる思惟の形式に關する運用の方式ではないにしても、またそれがさういはれるのはアリストテレスによつてではなく、却つて中世の繼承者の功罪に歸せらるべきものであるとしてもアリストテレスの論理が今日の形式論理の先驅者であり、或はその如き論理方式の基因をなしたことだけは何人も認

めざるを得ぬところであらう。

哲學は最も根本的なる立場に立たねばならぬ、それの出發には擅なる假定を許容してはならぬ。論理のよつて立つところは能ふ限り疑ふべからざる確かさに於てあらねばならない。ところが「存在は存在である」といふことほど不可疑にして確實なものはあり得るだらうか。存在とは何であるか、存在とは存在である、世にこれほど明かにして確かなものはないであらう。それは餘りに明かであつて殆ど自明的でさへもあるのである、そして自明的なるものは餘りの明かさの故に却つて何事をも明かにしないのではないか。それは truth であるよりも truism であり、眞なることを越えて當り前のこと、云ふを要しないこと、云ふべく餘に愚なこととなつてしまつてゐる。存在とは何であるかといふ問ひに答へて、存在とは存在であると云はれても、要するに何事も答へられないと同樣であり、我々はそれによつて何の敎へられるところもないのである。學問とはかくの如き迂愚を敢えてするものなのであるか、論理とはかく分りきつたことをさも重大なる原理であるかの如く取扱ふものなのであらうか。

カントの哲學がアリストテレス以來の形式論理を打破して、一つの新しい論理學を樹立し得たことは有名である。それは先驗的論理學であつた。しかしこの論理學が學問の分野に一つの新しい領域を拓いたといはれるのは如何なる意味に於てであるか。カントによれば同一律、矛盾律等は思惟の法則ではあつても認識の原理ではあり得なかつた。それらは思惟にとつて必要にして十分なる原則ではあつても、認識にとつては必要ではあるが必ずしも十分なる原理ではあり得なかつた。そしてカントにとつては思惟は必ずしも認識ではなかつた、學問の仕事は單に思惟することではなく、眞理を認識するところにあるべきことはカントの哲學の出發點をなしてゐる。單に考へ得ることが卽ち存在することではない。物自體は思惟し得るが認識することはできない。矛盾のないといふことは思惟の正しさを證明はするが必ずしもそれ故に眞理性を言表してはゐない。二つの直線と平面とは矛盾した概念ではないが――矛盾とは肯定と同時に否定することであるから――二つの直線は平面を圍むことができない。平面の存在には少くとも三つの直

線を要するのである。

カントの好んで用ひた區別の一つに分析判斷と綜合判斷とがある。分析判斷とは概念の分析によつて得らるる判斷であり、その基礎的原理は矛盾律である。これに對し綜合判斷には矛盾律と異つた一個の原理を要する。但し綜合判斷がそれから導き出されるところの原則が如何なるものであるにせよ、それは常に矛盾律に從つて原則から導き出されねばならぬ。何となれば凡てのものが矛盾律から導き出されるわけには行かぬけれども、如何なるものもこの原則に反してはならぬからである（カント、プロレゴメナ二節）。綜合判斷にとつては矛盾律は缺くべからざる原則ではあるが、十分なる原理ではなかつた。

矛盾律は一般に形式論理學においては「Aは非Aではない」といふ命題によつて表されてゐるが、カントは之を「如何なるものにもそれに矛盾する述語は屬しない」といふ命題に書き改めてゐる（K. d. r. V. B. 190）。カントにとつて矛盾律は本來的には分析判斷の原理でなければならなかつた。矛盾律を言表すに「AはAであるとともに——同一の場所または時間に——非Aであることはできぬ」といふのは少くとも不正確を免れぬ。なぜならそれは「ある物が存在し同時に存在しないことは不可能である」といふことであるが、カントによればこの命題には不注意かつ不必要にも、綜合が既に含まれてゐる。第一にそこには不可能といふ語によつて必然的な確實性が云ひ表されてゐるし、第二に同時といふことによつて時間の制約をうけてゐる。AはAであるとともにAでないことは不可能であるが、或人は今は若くとも次の時には年老いてあることは可能であらう、また或人はAに對しては丈高いがBに比しては低いことも可能であらう。矛盾律は單なる論理的原則であるから、時間の條件が入つてはならぬ。同時とか同一の場處といふ如き要素が入つては論理の純粹性が失はれるからである。矛盾律は嚴密には次の如く表明せられねばならぬ。「如何なる無學者も學者ではない」と。そしてそれは無學者といふ概念を別の言葉、卽學者でないといふことによつて言ひ換へただけである。矛盾律が同一律と同じ原理であることがこの點からしても明かとなるべきであるが、

カントにとつて重要なことはこの原理が就中分析的であり、無學者といふ概念の分析からしてこの判斷が必然に生するといふことであつた。

分析判斷に於ては矛盾律が必要にして十分なる原理であるが、綜合判斷にとつてそれは必要ではあるが決して十分なる原理ではあり得ない。後者に於ては別に一個の原理を要するのである。この新しい原理は何であるかといふ問は綜合判斷を構成する根本要素は何であるかといふ問題であり、さらにはカントの先驗的論理學が孰れの點に於て形式論理から根本的に區別せられ得るかといふ問題となるのである。それ故に分析判斷と綜合判斷との區別とは經驗的には流失的（flessend）であり、心理學的には一つの判斷にしてこの兩方面を具へてゐると見られるものもあるが、カントの批判的なる立場にとつて恐らく何ものにも換へがたき重要なる區別であるといはねばならぬのである、それを認めねばカントの先驗的論理學は成立し得ぬのみでなく、これらを區別することからして彼の哲學が始まり得るのであるからしてである。

しからば綜合判斷に於ける必要にして且つ十分なる原理とは何であるか。必要なる原理は矛盾律であるが、十分なる原理とは何であるのか。かつてライプニッツは眞理を二つに區分して永遠の眞理（la vérité éternelle）と事實の眞理（la vérité de fait）とした。そして前者を支配するものは矛盾律であるが、事實の世界は一つの異れる原理を――即ち充足理由の原理を必要とすることを論明した。充足理由とはいふまでもなく事物の存在にとつてそれか存在すべき十分なる理由をいふのである。事物は何故にかくの如くあつて他の如くあらざるか、――さらに事物は何故にそこに有つてないのではないか、事物の存在の根據が問はれるところに一つの新しい原理が必要となる。それは一般的には根據の問題であるが、單なる理由ではなく、一つの事物の存在にとつて充分なる理由をいふのである。

カントの綜合判斷が果してライプニッツの充足理由から發展したものであるか否かは歴史的に不明であるが、少くとも形式論理から先驗的論理に到る過程にはライプニッツの論理が位置づけられてゐることは明かであるであらう。

カントにとつてはしかし二重の眞理は認められなかつた。眞理といはるべきものは分析判斷によつてではなく、專ら綜合的なる判斷によつて可能なのであるからして、矛盾律は認識の形式を整へるものとして消極的には必要であるが、知識を積極的に十分に可能ならしむるものとして別に一つの要素が要請せられる。それは概念とは異れる經驗の要素であつた。二つの直線は平面を圍むには不十分であつて三つの直線をまつて始めてそれが可能であることは概念の分析によつてではなく、直觀の與料をまつてなしとげ得られることがらである。「純粋數學的認識はその命題に於て、概念を越えて概念に對應するところの直觀がふくむところのものにまで到らねはならぬ、――故にその命題は概念の分析によつて、卽ち分析的に發現することはできぬ、また發現してはならぬ、從つてすべて綜合的である」(Prolegomena § 2)。純粋數學の認識ですら尙且つ然りであるとすれば、物理的なる、又はその他の諸科學の認識も、否さらに形而上學判斷すらも本來的には綜合判斷でなければならなかつたのである。

カントの論理學は經驗に先き立つ何らかアプリオリなる形式を豫想することに於て先驗的ではあるが、概念を超越する何らかの存在に關係する點に於ては超越的論理學である。Transcendentale Logik とはこの二つの意味をふくむべきであるが、主として前者の見方からカントを解するものは新カント派の論理主義であり、後者の立場にあつてカントを把握せんとする人々は實在論的なる、乃至は形而上學者としてのカントを見んとする人々であるであらう。今の場合我々にとつて意義深きは後者の立場であつて、カントの認識論が形式論理の根本的修正であると考へられるのもこの意味に於てであつたのである。

二

矛盾律を認識の必要なる條件ではあるが決して充分なる原理でないことを洞察して、形式論理を根本的に批判し、修正した人がカントであるとするならば、矛盾律の意味を逆轉することによつて形式論理を徹底的に覆へした人はヘ

ーゲルであるといはねばならぬ。彼の論理は辯證法であるが、カントの先驗論理は主として同一律の批判にあつたに對し、辯證法は矛盾律の逆轉に全力をそそいでゐる。同一律はAがAであることを原理とし、先驗論理はAがBであることを確立せんとするものであるに對し、辯證法はAが非Aであることを論證せんとする。それはまさしく矛盾律の逆轉に非ずして何であらう。矛盾律は本來的に無矛盾性を原則とするが、辯證法は逆に有矛盾性を原理とする。矛盾があつては眞でないことを云ふのが形式論理であるに對し、逆に矛盾があることによつてのみ眞理の成立を主張せんとするものが辯證法であつたのである。この意味に於てヘーゲルの論理學は形式論理に對する單なる批判であるよりもむしろまさに逆轉であるといはるべきであらう。しかしかくの如き辯證法論理は歴史的に如何に發展し、また理論的に如何なる位置を一般の論理學の體系に於て占むべきであるのであるか。ディアレクティクが既にゾエノンに淵源を有することは通說であるが、このことはそれが矛盾の原理を中心とする論理であることを何よりも雄辯に語つてゐるといはねばならぬであらう。しかし矛盾についての解釋はゾエノンとヘーゲルとでは宛も反對の意味をもつてゐた。運動が矛盾した概念をふくむが故に否定せられたのはゾエノンに於てであるが、矛盾を實在の原理とするヘーゲルにあつては凡ては運動として又は過程として、又は轉化として把握せられざるを得なかつた。矛盾あるものを許容しない點にゾエノンの形式論理があつたが、ヘーゲルの辯證法はまさに矛盾の關係を根本原理としてゐる。正と反とは單に異れる二つのテーゼではなく、正の定立せられるところに反は措定せられざるを得ないが故に、存在は常に動き發展してやまぬのである。ゾエノンにとつて存在は靜であつたが、ヘーゲルの存在は常に動でなければならなかつた。矛盾の原理は前者にあつては遂に詭辯に終つたが後者にあつては正當なる論理を構成する原理として働いた。ヘーゲルが形式論理を逆轉したといはれるのもまさしくこの意味に於てであつたのである。

しかし辯證法に於ける、矛盾のかくの如き積極的なる働きは何を正當なる理由としてゐるのであるか。先づカントの先驗的論理はAがBであるといふ綜合判斷であるが、ヘーゲルの辯證法的判斷はAは非Aであることを出發として

ゐる。ところが非AとはAに非る凡てのもの――從つてBでもあり、Cでもあり其他のものでもあり得る凡てであるから、Bは非Aの一種でなければならぬ。從つてAがBであるといふのはAが非Aであるといふことの一つの特殊なる場合であるにすぎない。AがBであるといふのは個別的判斷であるが、Aが非Aであるといふのは無限判斷である。カントは判斷の論理的性質として肯定的と否定的と無限的とを區別したが、ヘーゲルの出發點となつたものは恰もこの無限判斷であつたのである。我々はカントの先驗論理からヘーゲルの辯證法に移るために「無限判斷」の構造について少しく立ち入つた探求をして見なければならぬ。

無限判斷は形式的には「Aは非Bである」といふ形をとつてゐるが、それは普通の否定判斷――卽ち「AはBではない」といふ判斷と如何に異つてゐるか。この二つの判斷は意味の上から別に變つたものではなく、ただ形式上言表し方を異にするのみとも考へられるであらう。しかしカントも云つたやうに無限的なるものは肯定と否定との綜合であつて單なる否定判斷ではない。またこの第三の判斷はこの故に肯定と否定とから派生されたものといふこともできない。それは無限判斷として獨自の形式をとともに、又それ自らなる內容を、もつてゐるのである。先づ無限判斷は否定判斷と異り、その中に肯定的要素をふくんでゐる。非BとはBに非る或ものであつて、何ものでもないのではなく、單に否定し去られたものではなく、依然として何らかの或るものなのである。例へばこの花は赤くないといふのは花について赤いことが否定されただけであるが、この花は非赤であるといへば、赤に非る何らかの色であることを――例へば黃であり紫であり等々であることを言表してゐる。ただそれが黃であるか紫であるかは決定せられないで色の領域に於て單なる可能性として殘されてゐるといふことを意味するのである。それ故に無限判斷とは實は無限定判斷の謂ひに外ならなかつた。infinite ではなく indefinite の意味に解せらるべきものであつた。判斷は肯定的であるか否定的であるかの孰れかでなければならぬが、その他に、肯定的にして同時に否定的なる判斷があり得る、――それが卽ち無限判斷であつた。それは形の上では肯定的であるが、意味的には否定判斷であると言はるるのが普通で

あるが、我々の言はうとするのはさらに次の點にある――無限判斷の非Bは單なる否定ではなく否定的なる或ものでなければならない。そしてそれは或ものである限り一つの存在であり、一つの肯定でなければならない。カントは否定的なるものについて四種を區別してゐるが（K. d. r. V. B. 348）、ここに云ふ非Bは勿論 nihil privativum でも nihil negativum でもなく、いはゞ nihil indefinitum とでも名づけ得る或ものである。そこに否定的とは無限定の意味であり、正確には無限定なる或ものである。有るものであつてしかも何ものとも限定せられないものであり、限定を缺く點に否定的ではあるが否定的なる或ものである點に於てまさしく有るものであり或るものである。或ものは先づ有るものとして規定せられる、それはたしかに有るものであるが未だ何らかの或ものではなく、單に有り得るところの或ものであるにすぎない。

そしてこの或ものの性格は無限定であるからして、之を支配するところの原理は可規定性（Bestimmbarkeit）でなければならない。それはそれ自らに限定をもたぬが故に限定せらるべく要求するものである。無限判斷の性格をこの可現定性に見出した人はサルモン・マイモン（Salmon Maimon）であつた。彼にとつてはこの「可規定性」の原理が一般に綜合の客觀的可能性であるに外ならなかつた（Versuch über die Transzendentalphil. S. 84）。サルモン・マイモンにとつてはそれは凡ゆる認識の根本原理でもあつた。例へば矛盾律にしても、與へられたる二つの、互に反對する賓辭は一つの主辭に同時に歸屬することができないといふのであるが、しかしこのことが主張せられ得る前にこれらの二つの賓辭がこの主辭についての、可能的なる賓辭であるか否かが先づ限定せられねばならぬ筈であらう（Versuch einer neuen Logik. S. 221）。若しさうでなければこの二つの賓辭が互に矛盾するといふことすら分らぬ筈であらうから。AはBであるといふ判斷はAについてBといふ限定性を與へ得ることであり、この否定はかくの如き限定性の與へ得られないことである。Aは非Bであるといふ無限判斷はAについてBに非る限定性を與へ得ることである。ただそれが――Bに非る限定が果して何を意味するかが未だ決定せられてゐない。その意味に於て無限

的であるが、無限とはやがて限定せらるべきことを要求するものであり、またその如きものとして肯定的であるといはねばならない。從つて凡ゆる綜合判斷の根本原理は、可規定性の原則（Grundsatz der Bestimmbarkeit）であるといふのがサルモン・マイモンの哲學であるが、このことは一般の判斷に於てよりもむしろ無限判斷についてたしかに妥當であるといはねばならない。なぜならそれは未だ限定されない點に於て否定的であるが、限定性を何よりも要求し、またまさに限定せらるべきものとしてある點に於て肯定的なのであるからである。

Jakob Gordin はその著 Untersuchungen zur Theorie der Unendlichen Urteil に於いて無限判斷について綿密な研究を行つてゐる。しかし彼はマールブルグ學派の學說を引き入れることに急であつて我々の志すところとはかなり隔つてゐるやうである。

無限判斷を以上の如く解すればそれは矛盾律及び同一律のさらに根柢にあるところの基礎的論理性であるといひ得るであらう。むしろこの論理性を根柢として肯定とか否定とかが限定せられるところに判斷がなりたつとも考へ得る。そしてかくの如く解することが形式論理をさらに一歩すすめて、先驗的論理に近づかしむる所以であつたとも言ひ得よう。カントの論理學はこの無限定性を何らかの實證的なるものによつて限定せんとするものであつた。對象論理は人の誤解する如く單に主體性を離れて事物を外なるものとして觀ずるものでなく、却つて何らか實證的なるものによつて無限定的なるものを限定せんとする認識の努力であるに外ならなかつたのである。ただ思惟可能性によつて規定せんとするのではなく、直觀の可規定性によつて限定せんとするものである。AはBなりといふことはAがBであり非Bでもあり得る無限定性を、そこに與へられたる直觀によつてそれがBであつてその他のものでないことを限定するところに成立つのである。

しかるにこの限定性を、再び一種の無限定性によつて定立せしめんとするものが辯證法であつた。AはBであるか非Bかである、卽ちAの領域をBと非Bとに分割してその孰れかに決定せんとするものが先驗的論理學であるが、そこではAが非Bであるならば必ずCかDか等々の何ものかでなければならなかつた。しかるにこの孰れかに限定した

いで、依然として非Bの立場に止つて之を直接にBに對立せしめんとするところに辯證法の立場があつたのである。それは卽ちヘーゲルの言ふ制限(Limitation)の論理である。制限とはAの論理的領域がBと非Bとの二つに分たれ互に他を制限してゐることであるが、このとき非Bはカントに於ての如くC、D等の何らか直觀的なるものとしてではなく、却つて非Bとして領域的に把握せられ、それが反定立として定立に對して措定せらるるところにディアレクティシュな考へ方が成立するのである。それは無限性を一つの限定とするものであつた。無限定性そのものを限定性とするものであつた。そしてかくの如き無限定的なる限定性が、限定的なる限定性に働きかけ、そこに一つの論理性を構成するものか制限の範疇であつたのである。

或るものはAであるか非Aかであり、その孰れかに決せられるのが判斷の作用であるが、Aであるとともに非Aであり、Aであることと非Aであることとが互に作用してそこに一つの特異なる論理性を發揮するのが辯證法である。それ故にそれはAが非Aであるといふ形をとる、形式論理ではAは決して非Aであることができずそれが非Aであることはそれ自らの否定を意味するのであるが、辯證法に於ては非Aによつて一旦は否定せられ(ein Ende machen)非Aに於てそれが再び保持せられ(aufbewahren)この二つの働が所謂止揚(aufheben)として作用するのである。その排棄の力は矛盾律にあるが、保持の方面は對立の原理に於て見出され、kontradikt と konträr との二つのオペラティオンがたえず交互に働くところに辯證法が發展するのである。矛盾律はAと非Aとが同時に成立しないことであるが、對立はむしろその兩立を豫想してゐる。非Aは單なる否定ではなく、一つの「他者」(das Andere)である。一つの他者でなくAにとつての他者である。Aは從つて非Aにとつての他者であるからしてAは「他者の他者」(Andere einer Anderen, Logik. I. II s. 496)でなければならない。そしてこの關係が辯證法に於ける同一性であつた。同一性とは端的に一であるのではなく、他者を通して、——他者の媒介によつて再び自己同一性を恢復するものでなければならなかつたのである。

以上の如く考へると無限判斷が論理性をカントの先驗論理からヘーゲルの辯證法論理に發展せしむる、少くとも重要なる一つの契機であつたことが分明するであらう。カントの範疇は常に三段の階層をなしてゐる、そして第三は單に第一と第二と相並んだ一つの或ものではなく、常に此等の兩者の綜合であるべきことはカントの注意するところである（K. d. r. V. B. s. 111）。果してさうであるとするならばこの階層は自ら辯證法的なるものを構成し、肯定と否定とに對し、就中無限的なるものがこの論理性の綜合を意味することも自ら明かであるであらう。

ヘーゲルに於ても無意味なる判斷と無限判斷とが峻別せられてゐる（Encyclopädie § 173）。精神は赤ではない、薔薇は象でない、悟性は机ではない……これらの判斷は一つの否定ではあるが否定としてもたり立たないほど反意味なる（widersinnig）判斷である、否それは判斷ですらない、否定としてむしろ乖離でしかない。正常なる否定はこれに反してそれがAでないが故にやがてBであり Cであり等々として限定せらるべき可能性を含んでゐなければならぬ。プラトンの用語をかりていへば單なる οὐκ-ὄν でなくして μὴ-ὄν でなければならぬ。そして無限判斷は勿論この意味のメー・オンでなければならなかつた。但しそれがBでありCである何らかの或ものに限定せられるのは先驗的論理であるが、依然としてそれを非Aとして規定するところに辯證法の論理性があるのである。この意味に於て辯證法は形式論理に直結する。形式論理の矛盾性を直接に逆轉したものが、辯證法の論理性であるといふことができるのである。ヘーゲルの論理がややもすれば個物の具體性から遊離して、論理性そのものの空轉であるかの如き觀を呈するのもこの理由に基くのであらう。

ヘーゲルに於てはAは非Aと直接に對峙する、存在は非存在に直面してゐる。Aが非Aなる何らかのもの卽ちBとかCとか等々になるのではなく、Aに對する或ものは常に非Aであり、存在は非存在に直ちに轉回する。ところがこの轉回を可能ならしむるものは何であるか。AがBに結合することを可能ならしめるものは直觀であるが、Aを非Aに對せしむるものは論理性である。Aと非Aとが對決するとき自らの有する論理性の故に互に否定しそして止揚せざ

るを得ないのである。Aは非Aと同一なのではない、さう考へることはシェリングの同一哲學に墮するであらう。Aと非Aとはその論理性に於て互に否定しつつ同一であるのである、その同一性はどこまでも否定を媒介とする同一性であつた、否定を經ることなしには互に結合し得ぬものが辯證法的同一性であつた。Aは非Aによつて否定せられ、非AはAによつて否定せられることによつてAはAであり、非Aも非Aとしてあり得る。AがBならばそこに何らの否定性もあり得ないであらう、Aが非Aであるからして直に結合し得ざるものとしてむしろ互に否定しながら結合するのである。辯證法論理はそれ故に論理性の最も端的に赤裸に發露せられたものといはざるを得ぬであらう。

しかしながらこの論理性は辯證法に於て徹底せらるればせられるほどまた一面にその直觀性を失ひ、少くともそれを稀薄ならしめざるを得ない結果となるであらう。何故ならばそこに於てAに對する非Aは無限的なる存在であり一つの可規定性として殘つてゐて、何らか具體的なるB、C等とし現はれ得ないからである。

三

それでは一方に論理性を鋭くしながら同時に直觀性を失はぬやうな論理的方法がないであらうか。私はそれを第四の論理――アナロギアの論理に於て求めたいと思ふ。この論理がプラトンの哲學から胚胎して中世の哲學に於て重要なる位置を占めてゐたことは歴史的に有名であるが、近代に於ては殆ど忘れられ、論理的には極めて薄弱なる論據をしか有しないものとして貶せしめられるに到つた。我々は再びこれを論理性の一つの現はれとして――單にさうであるのみでなく、正しくは新しい第四の論理として又は新しき存在の論理として提唱したいと思ふのであるが、それが特に存在の論理と考へられる所以は何にあるであらうか。さらにそれに先立つてこの論理の論理性が果して何處にあるのであるかを明かにしなければならない。パルメニデスに於ては思惟と存在とは未分であり、形式論理に於ては論理は專ら思惟の方式を明かにするものとなり、カントに到つて論理とは思惟と存在との關係をとりあつかふものとな

つたが、ヘーゲルは思惟と存在との同一性に出發しながらむしろその論理性に重きをおいたに對し、アナロギアの論理は存在の側面に重點を置くのである。そしてそれが餘りに存在と直觀とを重視するところから、ややもすればその論理性を疑はれるのであるが、果してさうであらうか。それは第一にヘーゲルの如くAと非Aとの對決から出發しないでAとBとの關係から出立する點に於て、カントの先驗的論理に近いであらう。しかしカントの如くAとBとの單に異れるものからではなく、AとBとの極端に異れるものを出發とする點に於てヘーゲルの辯證法に親しいのである。AとBとは單に異れるものでなく、最も異つたものであるからして殆どその間に連結を絶してゐる、例へば神と人間とは一は絶對であり他は相對であつて全く異つたものであり、その間に容易に同一性を說くを許さない。神人合一の甘き神祕に安んずることが許されない。しかしこの論理に於て取扱はれるのはどこまでもAとBとの關係であつてヘーゲルに於ての如くAと非Aとの關係ではない。神は人の否定でもなく、神を否定することによつて人は生れてこないであらう。しかも神と人とは懸絶してゐる。神は人間にとつて全く他なるものであり、絶對的なる他者である。神を人間からして、または人間になぞらへて引き出すことほど神に對する冒瀆はないであらう、神は全き善であるが、人間はけがれたる罪人である、その間に同一性はない。(Creaturae…quaevis aliquam Dei similitudinem gerant in seipsis, tamen maxima dissimilitudo subest. Thomas, Ver q 1a 10)。存在は物質であり思惟は精神である、これらを直に同一視するわけにはいかない、しかもかくの如く全く異る二つのものは如何にして結合せられ得るのであるか。

ヘーゲルにとつてはそれらは互に否定することによつて結合する。これらを一つの綜合として可能ならしむるものはこれらのもつ論理性そのものによつてであり、それを媒介するものは謂はば媒介するものなき媒介である。しかるにアナロギアの論理に於てAとBとは否定の論理によつては結合することができない。しかもこの兩者は極端的に隔たつてゐるのであるから、これらを結合するためには第三の媒介者を要する。表式的にいへば A=B ではなく

A:C=C:Bであり、AとBとは直接に(in recto)等しいのではなく間接に(in obliquo)等しいのであり、其の間にCといふ第三者的媒介を要するのである。AとBとは互に異りながら、しかもその異ることに於て大なる距離を有するから、これらを統一にもたらすためには第三の中間者(τὸ μεσον)を要するのである。アリストテレスも云つたやうに、アナロギアとはメソンなのである(Eth. Nik. v. 7. 1131 B 11)。中なるものを容れることによつて一見して何の關係もなささうな二つのものを綜合せんとする論理が卽ちそれであつた。

アナロギアの論理はAとBとの關係であるが、しかしカントの場合とは異りこの二つのものの端的なる綜合がではなく、それとは極度的に對立する或ものである。それは存在的に言つて殆ど非Aと同樣なる位相に於てあるべきであるであらう。その點に於てそれは辯證法ともつらなり、或はそれをもふくむと言ひ得る。しかしそこに對立するものは論理のそれではなく、存在の對立であるからして、これらの結合は第三の媒介者によつて、又はそれを通じてのみ可能となるのである。

ところでこの第三の媒介者を容れるといふのは何を意味するのであるか。アナロギアの論理に於てAとBとは極端的に異るものであり、それらは互に異れば異るほどより多くの結びつきを見出すのであるからAとBとの關係はAと非Aとの關係にまで發展せざるを得ぬであらう。そこにそれが辯證法に近づく所以のものが見られるのであるが、アナロギアの論理は勿論辯證法ではない。その區別はしかし何處にあるのであるか。

辯證法は形式論理の矛盾律の逆轉であるが、アナロギアの論理はむしろ排中律の逆轉である。排中律はAと非Aとの他に第三のものを許さないのであるが、アナロギアに於ては明かに中間的なるものを認め、むしろこれを媒介として成立つからである。思想の三法則といはれるものが同一律と矛盾律と排中律とであるとするならば、同一律に反對したものはカントの先驗的論理であり、矛盾律を逆轉したものはヘーゲルの辯證法であり、排中律を轉倒せんとするも

のが、アナロギアの論理であるともいへるであらう。我々は既にカントとヘーゲルについて多くを知つてゐる、排中律を出發とする第四の新しき論理が可能であるといへないだらうか。そしてそれがまさしくアナロギアの論理であると考へ得ぬであらうか。この論理の構造を明かにすることによつて學問の世界はさらに一つの新しき論理性を得ると言ひ得ないか。アナロギアの論理が他の三つの論理と如何なる關係に於てあるかは略々上に考察せられた。我々は更にこの論理の論理性を明かにすることによつて人間の有する論理的なるものにさらに一つの豐かさを加へ得たいと思ふ。

さて拒中律は次の命題から成立つてゐる、凡てのAはBであるかBでないかの孰れかでなければならぬ、若しBであることとBでないこととが同時にAに歸屬するならばそれは矛盾律に觸れることになる。又若し兩者を否定してBであることもなく、Bでないこともないとすれば、否定の否定は肯定となるからそれはAがBでないか、AがBであることとなり、これらが同時に成立することはやはり無矛盾の原理に抵觸することとなる。要するに排中律は矛盾律の發展に外ならぬ。矛盾律は同一律の反面であり、排中律は矛盾律の發展に外ならないと言ひ得るのである。しかし辯證法によつて形式論理の矛盾律は逆轉せられたやうに、排中律もその意味を逆轉することによつて第四の論理に入つてくる。AはBであるかBでないかの孰れかであるのではなく、AはBでありBでもないことも有り得るし、又AはBであることもBでないことも共に有り得ないこともあるのである。排中律は「これかあれか」(entweder-oder)を意味し、その孰れかに決定せらるべきことを要求する。しかし辯證法にはこの外に、これでもあり、あれでもあり得る(sowohl-als-auch)ことを許し、更に第三に「これでもなく、あれでもない」(weder-noch)をも認めるのである。前者がヘーゲルの辯證法であり、後者が例へば中觀論の立場であることは別に詳論を要することであるが、我々はこれらからして排中律の必しも行はれざることのあり得ることを證して餘りあることを知る。中觀の百非千不は凡てについて否定を重ね、その根柢にある空の世界を浮び上がらせることによつて排中律を無視せんとする。勿論

それは辯證法の世界であつてアナロギアの論理ではないが、矛盾律を逆轉するところにやがて排中律も意味を失ふことが、それによつて證明し得られるのである。

排中律を正面から破壞するものはアナロギアの論理であつた。それはAがBであるかBでないかの孰れが一つでなければならぬといふ二肢的判斷を失當ならしめて多くの離接關係に轉換するのである。それは辨證法に於ける如く非Bをアンチテーゼとしてではなく、一の無限的なるものとして、——或は可規定的なるものとして把握するのである。卽非BはBに非る何らかのもの、CでありDである等々の或ものでなければならぬからである。ブラウアー（Brouwer）の問題もそこにあつた、彼の分析は直接に對象に向ふよりも、むしろ可能的な規定作用そのものを問題とし、そしてかくの如き可規定的なものは無限に有り得るから排中律は彼の學問體系から當然除外せられねばならなかつたのである（P. Hofmann: Das Problem des Satzes vom ausgeschlossenen Dritten, Kantstud. Bd. 36. s. 101）。プラウアー等の論理學者が排中律を排斥することによつて一つの新しき論理性を樹てんとする運動もこの點からして注目に値するであらう。アナロギアの論理はさらに一歩をすすめてゐる。それはAとBとの關係を求めるために第三者をその間に仲介せしむるところの論理である。辯證法は媒介者なき媒介であるが、アナロギアは媒介者のある媒介であつた。論理的には辯證法が徹底してゐるが、存在的にはアナロギアの論理が一層現實に近いであらう。存在が何故に非存在を媒介としなければならぬかは專ら論理性によるが、AとBとが仲介者を要するのはこれらの存在の相互の Fremdheit によるのである。この媒介者は卽人間としての形成者であつた。それは單に二つの項の中間にある第三の項でなく、まさしく形成的人間でなければならなかつた。雜多と統一との間に、內容と形式との間にあつてこれを媒介するものは單なる圖式ではなく、まさに圖式を形成する人間でなければならなかつた。凡て全く異質的なるものが互に結合し得るのは人間の形成によつて、——形成する人間を通じてのみ可能であるからである。しかしこれらの點について詳しく論ずることはまた別のことに屬するであらう。

（了）

アナロギアの論理性については又別に論じたい、この稿の執筆後に James F. Anderson: The Bond of Being を讀む機會に惠まれて得るところが甚だ多かつた、今はたゞこの論理の論理性と歴史的なる位置づけとを試みるに止めたのである。

前號目次

支那思想に於ける自由と必然……　重澤俊郎

危機神學の生成とその展開（承前）：—近世前期フランス精神史論—　樋元和一

ヘーゲルに於ける人倫の成立……の一過程　岸畑豐

兒童心理學の近況（岡原太郎）

ENGLISH OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article

Logic as Logics

By Tokuryu Yamauchi

Four kinds of logic are found throughout the history of Western philosophy: 1. formal logic, 2. transcendental logic, 3. dialectical logic, 4. analogical logic. The formal logic established by Aristotle is based upon the law of identity. According to Parmenides, from whom this law is originally derived, there are only two ways how to start philosophising, viz., 'being is being' or 'not-being is not being'—an explicit declaration of the law of identity. Being undoubtedly the surest and the most evident of all the propositions, it is, however, at the same time simply self-evident saying almost nothing, nothing indeed but a mere truism.

This is the reason why Kant maintained that genuine judgements should be synthetic instead of being merely analytic; what his transcendental logic requires is: 'A is B', and not: 'A is A'; he remarks that the law of identity—so also that of contradiction—is a principle essential to our thinking but is not sufficient by itself for constituting any knowledge worthy of the name. From this point of view the transcendental logic may be looked upon as an amelioration of formal logic.

Another law indispensable in the formal logic was that of contradiction, the discovery of which is ascribed to Zeno, the disciple of Parmenides. It is no other than the law of identity itself, only in a different aspect. From Zeno's view-point the third, i. e. the

dialectical, logic would be nothing but the violation of the principle of his logic; for, while in his logic the law of contradiction excluded contradictions, postulating their non-entity, the dialectical logic does include contradictions. Its formula reads: 'A=non-A'. Such a formula, unallowable in the traditional logic, constitutes here its very essence. Hegel's logic is thus a construction exactly reverse to that of Zeno.

In the fourth place we reach the logic of analogy, notable in significance in spite of its serious neglect on the part of the human intellect. Having originated in the philosophies of Plato and Aristotle, it was explicitly carried out by Thomas Aquinas. This logic consists in the reversal of what was required in the formal logic by the law of excluding the middle, which law, allowing nothing midway between two truths, postulated that one proposition must be either true or false and that there could be none which would be neither true nor false. It is when the so-called probable or possible assertion comes into question, that the analogical logic has its rôle to play. This may be formulated: 'A : C=C : B'. Here A and B are not connected directly; a middle term is introduced, which connects these two terms. I have not, however, entered into discussions in full concerning the nature and significance of this particular logic; the theme has been of late carefully dealt with by J. Anderson in his work "Bond of Being". The aim of this paper was rather to exhibit the said four logics in comparison, examining each in its specific character as a logic; only, stress has been laid on how the logic of analogy should be necessitated by the dialectical logic itself; the key to the understanding of this point will be found, as I believe, in what is called the infinite judgement.

A Sociological Analysis of Primitive Society

By Jisho Usui

1. Primitive people form highly closed societies each of which has little contact with the rest of the world.